

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第217集

西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群

# 上大豆塚遺跡

長野県佐久市長土呂上大豆塚遺跡発掘調査報告書

2014

佐久市教育委員会

## 例 言

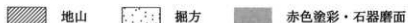
- 1 本書は有限会社田園不動産による宅地造成工事に伴う上大豆塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 有限会社田園不動産
- 3 調査主体者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名及び所在地 西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群 上大豆塚遺跡 (NTK)  
佐久市長土呂字上大豆塚
- 5 調査担当者 久保 浩一郎
- 6 本書の編集・執筆は久保が行った。
- 7 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の略称は以下のとおりである。  
H-竪穴住居址 M-溝址 D-土坑 P-ピット
- 2 遺構断面図の標高は可能な限り遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。
- 3 遺構の計測値は以下の値である。



- 4 スクリーントーンの表示は以下のとおりである。なお本書で用いる地山とは、遺構の基盤層を表すものである。



- 5 遺物の実測図番号と写真番号は対応し、特に記載のないものは縮尺 1/4で掲載した。
- 6 本書で示した方位は真北であり、座標値は世界測地系に準拠している。
- 7 遺物観察表における ( ) は推定値を、〈 〉 は残存値を示す。

## 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過・・・・・・・・・・ 1	第Ⅲ章 遺構と遺物・・・・・・・・・・ 7
第1節 発掘調査の経緯・・・・・・・・ 1	
第2節 調査組織・・・・・・・・・・ 1	第Ⅳ章 まとめ・・・・・・・・・・ 14
第3節 調査日誌・・・・・・・・・・ 1	
第4節 遺構・遺物の概要・・・・ 1	
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境・・・・・・・・ 2	
第1節 地理的環境・・・・・・・・・・ 2	
第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・ 4	
第3節 基本層序・・・・・・・・・・ 5	

## 第 I 章 発掘調査の経過

### 第 1 節 発掘調査の経緯

上大豆塚遺跡は、佐久市長土呂に所在する縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。佐久小諸境を南西に流下する湧玉川左岸の台地上に立地し、標高697m内外を測る。

今回、遺跡内において有限会社田園不動産による宅地造成工事が計画されたため、遺構の確認を目的とした試掘調査を平成25年2月19日～21日に実施した。その結果、対象地北側で弥生時代の竪穴住居址や溝等が検出された。保護協議の結果、遺跡の保存が不可能な部分について記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、重機により表土を除去した後、調査区内に4mグリッドを設置した。その後人力により遺構確認面の精査・遺構検出を行い、遺構掘削・写真撮影・実測図作成作業を順次行った。

### 第 2 節 調査組織

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	土屋盛夫	
事務局	社会教育部長	伊藤明弘	(平成24年度) 矢野光宏 (平成25年度)	
	文化財課長	吉澤隆	(平成24年度) 三石宗一 (平成25年度)	
	文化財調査係長	三石宗一	(平成24年度) 比田井清美 (平成25年度)	
	文化財調査係	須藤隆司	小林真寿 羽毛田卓也 (平成24年度)	
		富沢一明	上原学 並木節子 (平成24年度)	
		神津一明	久保浩一郎	
嘱託職員	林幸彦			
調査主任	佐々木宗昭	(平成24年度)	森泉かよ子	
調査担当者	久保浩一郎			
調査員	赤羽根篤	赤羽根充江	浅沼勝男 飯森成英 井出孝子	
	岩松茂年	加藤ひろ美	木内修一 小島真 小林妙子	
	神津和子	神津千春	坂井一夫 田中ひさ子 土屋邦子	
	羽毛田利明	橋詰勝子	橋詰信子 林まゆみ 広瀬梨恵子	
	堀籠保子	武者幸彦	柳澤孝子 横尾敏雄 渡辺学	

### 第 3 節 調査日誌

平成25年3月5日	バックホウにより表土掘削を開始する。
3月6日	調査区内にグリッド杭を打設。遺構確認面を精査し、遺構検出作業を行う。
3月7日～	遺構掘削、遺構写真撮影、遺構断面図・平面図作成を順次行う。
3月12日	調査区内を清掃し、全景写真撮影を行う。
3月13日	機材を撤去し、現場作業を終了する。
3月18日～	室内作業開始。遺物洗浄、接合、実測、報告書執筆等を順次行う。
平成26年3月	報告書を刊行し、すべての作業を終了する。

### 第 4 節 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址 2軒 (弥生時代後期)、溝址1条、土坑2基、ピット5基
遺物	弥生土器 (壺・甕・高坏・鉢)、土製品 (紡錘車・土製円盤)、石製品 (磨石・敲石・砥石・削器)、鉄製品 (鉄鏃)

## 第II章 遺跡の位置と環境

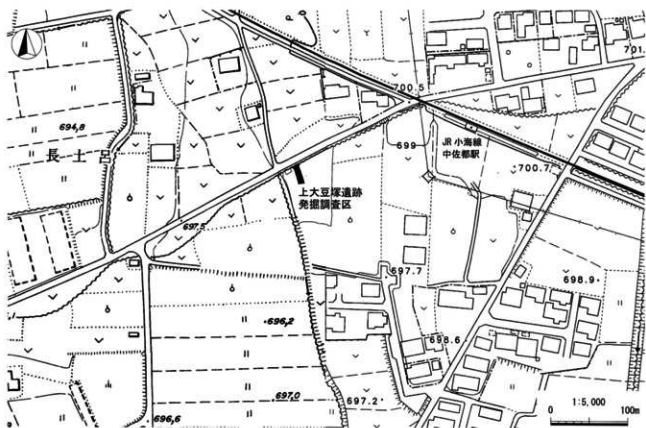
### 第1節 地理的環境

佐久市は長野県中央東端、群馬県に接し四方を山地・台地に囲まれた標高700m程度の盆地内に位置する。佐久平と呼ばれるこの盆地は、東に荒船山・物見山・寄石山・八風山などを主峰とする佐久山地、北に浅間山、南に蓼科山・八ヶ岳を望み、その中央には周囲の山々から流れる支流を集めながら千曲川が北流する。佐久平の地質を外観すると、千曲川により南北に二分される。南側は蓼科・八ヶ岳山麓からの小河川により形成された小規模な扇状地及び千曲川の沖積低地が広がり、河床礫層と沖積粘土層が主体となる。一方北側は浅間山の火山噴出物により形成された台地である。主な噴出物としては、約23,000年前と推定される塚原泥流と、約13,000～10,000年前の軽石流がある。塚原泥流は、かつて存在した推定標高2,800mの黒斑火山が水蒸気爆発により山体崩壊し、岩塊が落下した堆積物である。その後の堆積により現在は岩塊の頂上部が露出して小丘状に点在しており、本調査区周辺の塚原・赤岩・平塚等の地名にも表れている。軽石流は2度にわたり噴出したもので、それぞれ第一・第二軽石流と呼ばれる。佐久市北部は主に第一軽石流が厚く堆積しているが、この堆積物が河川の浸食をうけて形成された浸食谷、いわゆる「田切り地形」が特徴的に発達している。

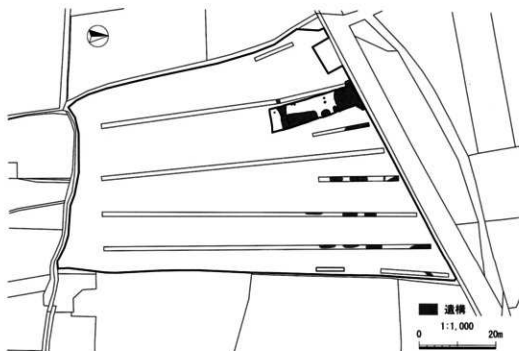
今回発掘調査を実施した上大豆塚遺跡は佐久市北端部の長土呂地籍に所在している。浅間山麓から延びる田切り地形の末端部分、北側の湧玉川と南側の濁川氾濫低地とに挟まれた台地上に位置している。本調査区は北側が西近津遺跡群に、南側が常田居屋敷遺跡群に属するが、台地上には西近津遺跡群と周防畑・常田居屋敷遺跡群とを画する浅い低地が認められる(第4図)。試掘調査結果からも本調査区南側に低地が存在したことがわかっており(第3図)、本調査区は地理的には西近津遺跡群の南端に位置付けられる。



第1図 上大豆塚遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)



第2図 調査区位置図



第3図 調査区及び試掘トレンチ配置図

## 第2節 歴史的環境

今回発掘調査を実施した大豆塚遺跡は佐久市北端部、湧玉川と濁川とに挟まれた田切りの台地上に位置している。この台地上には北側から芝宮遺跡群・近津遺跡群・周防畑遺跡群・西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群等の遺跡群が存在する。弥生時代と奈良・平安時代を主体としながらも、縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が濃密に分布しており、佐久地域の歴史を語るうえで重要な地域である。

近年では、上信越自動車道や北陸新幹線、さらに中部横断自動車道の建設に伴い大規模な開発が進んでおり、開発に伴い埋蔵文化財資料の蓄積がなされている。ここでは調査成果から周辺の様相を時代ごとに概観したい(第4図、第1表)。

**旧石器・縄文時代** 第1節で述べたように、本遺跡周辺の台地は約13,000年前の火山噴出物で形成されているため、本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は皆無である。縄文時代では、集落は周辺の山麓に営まれることが多く、本遺跡周辺では土器や石器、落とし穴などが散見される程度である。このことから主に狩猟・採集の場となっていたと考えられるが、本調査区北東の西近津遺跡Ⅷ(③)において、縄文時代後期の敷石住居址が1棟確認されている。縄文土器や土偶、石棒などが出土しており、墓と考えられる土坑も見つかっている。中佐都駅北側の台地縁辺部に当該期集落の存在が想定される。

**弥生時代** 前期・中期の遺構・遺物は、本調査区周辺では今のところほとんど認められず、南側の濁川沿岸に偏って分布している。弥生時代後期になると、集落数も増加し本調査区周辺でも集落が営まれるようになる。後期の遺跡は濁川により形成された低地に沿って分布しており、低地における水稲耕作を生産基盤とした集落が営まれていたと考えられる。当該期の住居址等も数多く調査されており、中部横断自動車道建設に伴い長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた西近津遺跡(⑦)では、国内最大級の大型竪穴住居址や翡翠製勾玉などが見つかっている。また、同遺跡、周防畑B遺跡(⑨)、宮の前遺跡(⑩)などでは、円形周溝墓や方形周溝墓などの墓も検出されている。このように弥生時代後期における本遺跡周辺は、遺跡密度、遺構・遺物の質・量ともに卓越しており、佐久地方において一つの中核をなす地域だったと考えられる。本調査区は西近津遺跡(③)から続く集落部の南端部に位置付けられ、当時南側には谷状の低地が存在していたと考えられる。

**古墳時代** 古墳時代になると集落数は激減し、弥生後期集落が営まれた地域の外縁部に、数棟の竪穴住居で構成される小規模な集落が点在する状況となる。西近津遺跡(⑦)では前期の方が検出されており、前期古墳の少ない佐久地域において希少な発見である。集落の減少傾向は中期前半にもっとも顕著となるが、中期後半以降、遺跡数は再び増加に転じ弥生時代後期以上の展開をみせる。本調査区周辺でも当該期集落が営まれており、西側には大豆塚古墳群や東池下古墳群などの古墳群も築かれている。

**奈良・平安時代** 古墳時代同様の場所に集落が営まれることが多く、本調査区周辺でも多数の住居址が見つかっている。奈良時代では西近津遺跡(⑦)で「郡」と刻書された須恵器片や、円面硯・瓦片が、大豆田遺跡Ⅳ(⑩)では円面硯・瓦片が出土しており、官衙や寺院の存在も想定される。平安時代では、奈良時代からの集落が継続されるが、住居の小型化傾向が窺える。西近津遺跡で「鉾子私印」と記された銅印が見つかっており、渡来系鍛冶工人の存在も想定される。また大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ(⑨)や宮の前遺跡(⑩)などでは「大井」の刻書・墨書土器が出土しており、古代大井郷の中核地域だったと考えられる。

**中世** 平安末期には、岩村田を中心とした千曲川右岸に八条院領の大井荘があったと考えられる。鎌倉時代になると、小笠原長清の子、朝光が大井荘に土着し大井氏を名乗るようになる。大井氏の元で現在の岩村田周辺が発展し、江戸時代の『四隣譚載』によれば、「賑わい国府にまされり」といわれるほどの隆盛を誇った。大井氏の衰退とともに一時荒廃するものの、現在の岩村田の町並みも基本的には中世の町割を踏襲しているといえる。大豆田遺跡Ⅳにおいても中世の掘立建物址・井戸・溝などが見つかっており、近現代において耕作地として利用された場所にも集落が広がっていたことがわかる。



第4図 周辺遺跡分布図

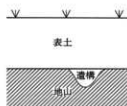
遺跡名	主な検出遺構	備考
① 大豆塚遺跡	住居址2 (弥生後期)、溝1、土坑2、ピット5	
② 西近津遺跡Ⅶ	住居址26 (弥生後期7 古墳2 奈良平安12 不明5)、竪立柱建物2、土坑12、溝址2	
③ 三貫遺跡	住居址4 (弥生後期1 古墳1 奈良平安2)、	
④ 西近津遺跡Ⅷ・Ⅹ	住居址29 (縄文1 弥生後期4 古墳9 奈良平安13 不明2)、円形周溝3、土坑37、溝址3	
⑤ 西近津遺跡Ⅵ	住居址10 (古墳5 奈良平安2 不明3)、竪立柱建物2、土坑4、溝址4	
⑥ 轟下遺跡	住居址20 (弥生後期4 古墳4 奈良平安9 不明3)、土坑29、溝址6	
⑦ 西近津遺跡	住居址500以上 (弥生後期～奈良平安)、周溝基12、古墳2、竪立柱建物址68 他	長野県埋蔵文化財センター
⑧ 周防焼遺跡群	住居址90以上 (弥生後期～奈良平安)、周溝基15、竪立柱建物址9 他	長野県埋蔵文化財センター
⑨ 大豆田遺跡Ⅰ	住居址41 (弥生後期23 奈良平安18)、周溝基2、土坑17	
⑩ 大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ	住居址26 (弥生後期5 古墳3 奈良平安16 不明2)、竪立柱建物址9、土坑34、溝址22	
⑪ 大豆田遺跡Ⅳ	住居址30以上 (弥生後期～奈良平安)、竪立柱建物址30以上、土坑140以上、溝址80以上 他	
⑫ 西近津遺跡Ⅱ	住居址6 (古墳5 奈良平安1)、土坑1、竪穴遺構1	
⑬ 西近津遺跡	住居址4 (古墳3 不明1)、溝址8	
⑭ 宮の前遺跡 他	住居址187 (弥生後期34以上)、竪立柱建物址56、周溝基14、土坑183、溝址47	
⑮ 中仲田遺跡Ⅰ・Ⅱ	住居址1 (奈良平安時代)、溝址3	
⑯ 辻の前遺跡Ⅰ・Ⅱ	住居址17 (弥生後期15 古墳2)、土坑1、溝址1	

第1表 周辺遺跡一覧表

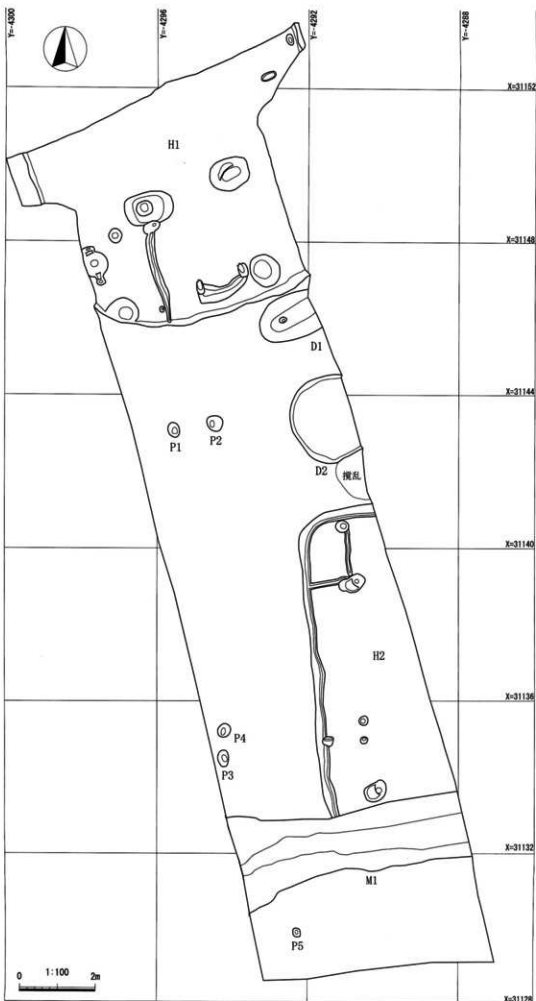
### 第3節 基本層序

本調査区における土層は上下二層に大別される。上層は暗褐色を呈する客土であり（耕作土含む）、地表下50～60cmの厚さで堆積している。下層は浅間第一軽石流の地山である。よって本調査区における遺構確認は地山上面であるが、本来の遺構構築面は削平されていると考えられる。

試掘調査では対象地北側に住居址等の遺構が認められた（第3図）が、南側には遺構が認められず、地山が傾斜して黒色土の堆積が確認された。このことから調査区南側が低地であったと考えられる。



第5図 基本層序模式図



第6図 上大豆塚遺跡全体図



### 第三章 遺構と遺物

H1号住居址 調査区北端に位置し、北側は調査区外に延びる。小判型に近い隅丸長方形を呈すると考えられ、主軸はN-18°-Wである。検出部分で南北長5.78m、東西長7.66mを測り、床面積44.3㎡以上となる。壁残高は50~60cmで、壁溝は認められない。ピットは掘りも含め17基検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2基が検出された。P<sub>1</sub>は長軸1.06m、短軸0.84m、深さ0.70mを測る。P<sub>2</sub>は長軸1.28m、短軸0.78m、深さ0.78mを測る。P<sub>2</sub>から南側には間仕切り溝と考えられる溝が南壁まで延びる。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は出入口施設に付随するピットと考えられる。P<sub>2</sub>の西側には炉が認められ、長軸0.75m、短軸0.69m、深さ0.26mの掘り込みに甕の底部(6)と壺の底部(5)が重ねて据えられていた。P<sub>5</sub>は西側が調査区外に延びるが東西0.59m、南北0.54m、深さ1.40mを測る。補助的な柱穴だろうか。P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>は貯蔵穴と考えられる。掘方ではP<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>は柱穴、P<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>は出入口施設に付随するピットと考えられ、住居の拡張が行われたと考えられる。

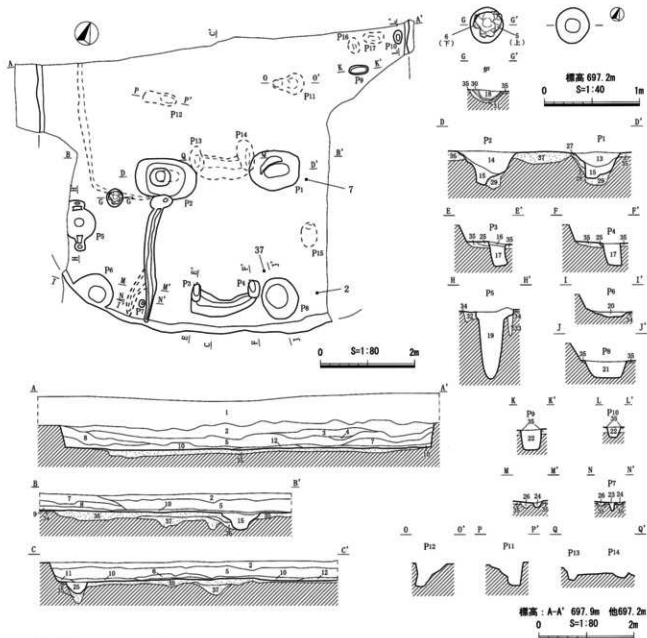
出土遺物には弥生土器・縄文土器・紡錘車・土製円板・鉄鏝・磨石・砥石などがある。住居址埋土からの出土が主体だが、9・22・31は床面からわずかに浮いた位置で検出された。

1は弥生土器の甕である。赤井戸式ないし吉ヶ谷式土器と考えられる。胴下位に最大径をもち、胴中位でわずかにくびれ口縁部まで直立する。口唇部には刻み目が施される。調整は外面胴部下半は縦方向のケズリが、上半から口縁部までは単節RL縄文が施される。他の土器と胎土が異なることから、搬入品と考えられる。2・3は壺の口縁部で、外反し端部は丸くおさめる。2は頸部に櫛描簾状文が施される。4は無頸壺の口縁部と考えられ、外面のみ赤色塗彩が施される。5は壺の底部で、炉の火床に転用されたものである。6~16は甕である。6は底部で炉に転用されたものである。7・8・12・13は外反する口縁で、口縁部から体部に櫛描波状文が施される。7・12は頸部に櫛描簾状文が施される。9は口縁端部がわずかに上方に延びて受口気味となる。口縁部から体部に櫛描波状文が、頸部に櫛描簾状文が施される。14・15は口縁端部が折返される。14は折返した口縁上端に櫛描斜走文、口縁下部に櫛描横線文、頸部には櫛描斜走文ないし櫛描羽状文が施される。15は端部を面取りし縄文が施され、口縁部は櫛描波状文が施される。16は甕の頸部と考えられ、櫛描横線文が施される。17~19は鉢である。17は内湾しながら立ち上り、18は直線的に開いて立上る。20~24は高坏である。20は端部が外側に屈曲し突起が付く。22・24は長短の差があるが、端部は外反する。25は縄文土器である。後期に位置付けられるものと考えられる。26・27は土製の紡錘車である。26は断面偏平で、表面はナデにより丁寧な作られている。27は表面に圧痕が残る、断面は中央の孔周囲が若干厚くなる。28~30は土製円板である。いずれも壺の破片の転用品である。37は鉄鏝である。無茎凹基式の三角形形鏝であり、基部両面には根挟みに固定した痕とみられる木質状の痕跡が認められる。38は器種は不明だが鉄製品の破片である。33~35は磨石・砥石である。いずれも正面に磨痕、周辺部に敲打痕が認められる。36は削器である。板状剥片の端部に刃部が作出される。37は砥石である。出土遺物から、H1号住居址は弥生時代後期後半に位置付けられる。

H2号住居址 調査区南東に位置し、東側は調査区外へ延び、南側をM1号溝址に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸はN-6°-Wである。検出部分で南北長8.44m、東西長3.18mを測り、床面積26.8㎡以上となる。壁残高は45~60cmで、壁溝が巡る。ピットは掘りも含め18基検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2基が検出された。P<sub>1</sub>は長軸0.89m、短軸0.41m、深さ0.45mを測る。P<sub>1</sub>の北側と西側に間仕切り溝が延び、西側は壁溝につながるが北側は壁溝との境にP<sub>3</sub>がある。P<sub>2</sub>は長軸0.60m、短軸0.46m、深さ0.51mを測る。南側壁溝からP<sub>2</sub>に向かって間仕切り溝が延びる。

出土遺物には弥生土器・土製円板・磨石・砥石などがある。埋土中からの出土が主体だが、4・5・8・9・15・16・23は住居址南側より床面からわずかに浮いた状態でまとまって出土した。

1~6は壺である。無形のものと赤彩のものがある。口縁部は外反して端部が丸くおさめるもの(1)と、端部が内湾ぎみに上方へ延びるもの(2)がある。頸部には櫛描横線文・櫛描簾状文・櫛描T字



1. 暗褐色土 (10YR3/3)
2. 黒褐色土 (10YR3/2)
3. 暗褐色土 (10YR3/3)
4. 橙色土 (5YR7/8)
5. 黒褐色土 (10YR3/1)
6. 黒褐色土 (10YR3/2)
7. にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
8. 黒色土 (10YR2/1)
9. 褐灰色土 (10YR4/1)
10. 黒色土 (10YR2/1)
11. 黄褐色土 (10YR2/1)
12. 暗灰色土 (N3/1)
13. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
14. 黒褐色土 (10YR3/1)
15. 褐灰色土 (10YR4/1)
16. 褐灰色土 (10YR4/1)
17. 褐灰色土 (10YR5/1)
18. 黒色土 (10YR2/1)
19. 黒色土 (10YR2/1)

客土

φ1 ~ 2cmの軽石・黄褐色粒含む。

φ1 ~ 2cmの軽石少量含む。

焼土含む。

φ1 ~ 2cmの軽石、ローム少量含む。

φ1 ~ 2cmの軽石、ローム少量含む。

φ1 ~ 2cmの軽石少量含む。

φ1 ~ 2cmの軽石少量含む。

φ1cm以下の軽石、ロームブロック少量含む。

灰多量、ローム少量含む。

黒褐色土ブロック多量含む。

灰多量、ローム少量含む。

φ1 ~ 2cmの軽石少量含む。

φ1cm以下の軽石少量含む。

φ1 ~ 2cmの軽石少量含む。

φ1cm以下の軽石少量含む。

ローム少量含む。

ローム少量含む。

20. 灰黄褐色土 (10YR5/2)

21. 黒褐色土 (10YR3/1)

22. 黒褐色土 (10YR3/1)

23. 灰黄褐色土 (10YR4/2)

24. 褐灰色土 (10YR4/1)

25. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)

26. 黒褐色土 (10YR3/1)

27. 灰黄褐色土 (10YR4/2)

28. 灰黄褐色土 (10YR4/2)

29. 明黄褐色土 (10YR7/6)

30. 黒色土 (10YR2/1)

31. 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)

32. 黒色土 (10YR2/1)

33. 灰黄褐色土 (10YR4/2)

34. 明黄褐色土 (10YR7/6)

35. 黄褐色土 (2.5YR5/6)

36. 黒褐色土 (10YR3/1)

37. にぶい橙色土 (7.5YR7/4)

ローム多量含む。

φ1cm以下の軽石少量含む。

ローム多量含む。

φ1cm以下の軽石少量含む。

ロームブロック少量含む。

黒褐色土ブロック少量含む。

φ1cm以下の軽石少量含む。

ローム少量含む。

黒褐色土ブロック多量含む。

ローム少量含む。

ローム少量含む。

ロームブロック少量含む。

ロームブロック少量含む。

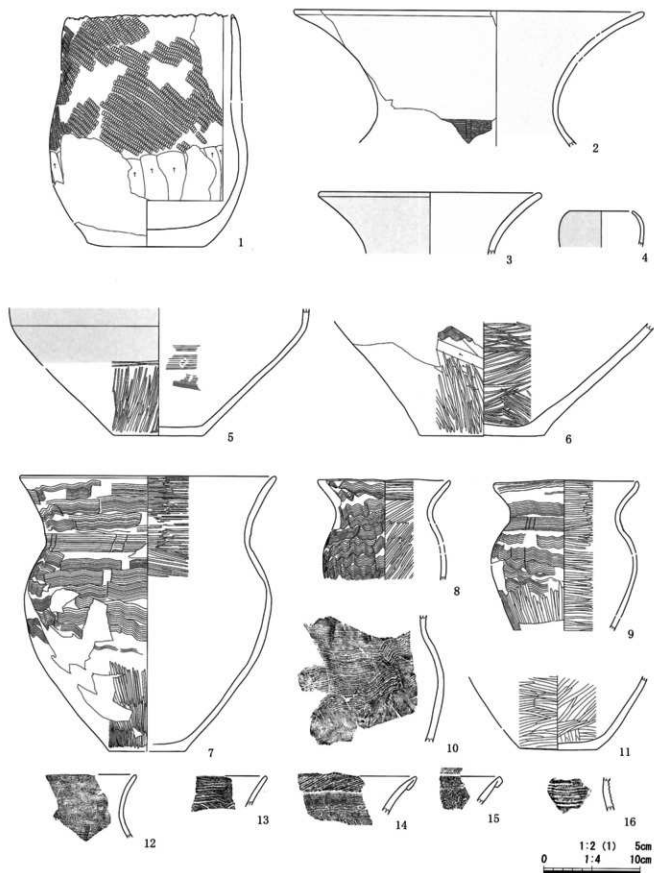
黒褐色土ブロック少量含む。

黒褐色土ブロック多量含む。

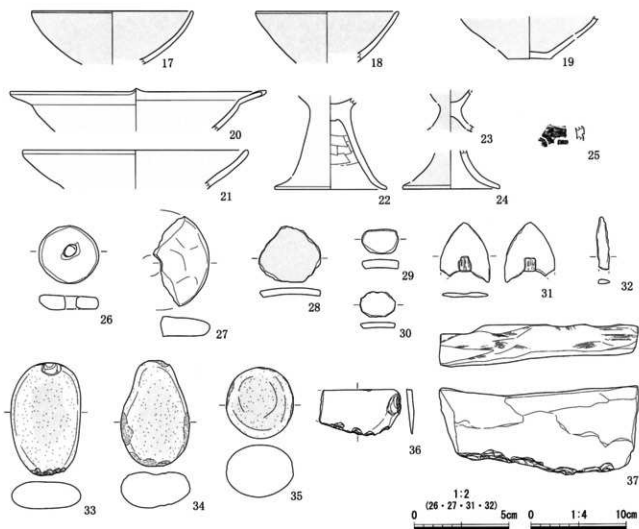
ローム少量含む。

黒褐色土ブロック少量含む。

第7図 H1号住居址遺構実測図



第8图 H1号住居址遺物実測図



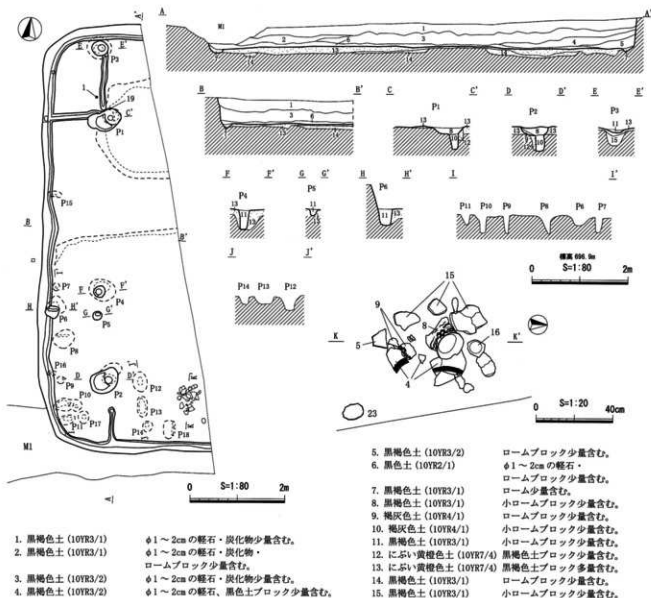
第9図 H1号住居址遺物実測図(2)

文が施される。7は広口壺と考えられる。8～18は甕である。8～11は口縁部が頸部から外反し端部が丸くおさまる。胴部上位から口縁部にかけて櫛描波状文が施される。12は端部が面取りされ櫛描横線文が、頸部には櫛描縷文が施される。13はハケによる調整痕を留め、櫛描波状文が施される。いずれも底部脇から体部下位にはミガキが、体部上位には櫛描波状文が施される。19～23は鉢である。19は片口鉢である。22は口縁部に孔がある。24は高坏である。25～31は土製円板である。28～31は半円形に整形される。32・33は敲石である。表裏面と周辺に敲打痕が認められる。34・35は磨石である。36は削器と考えられる。出土遺物から、H2号住居址は弥生時代後期後半に位置付けられる。

**M1号溝址** 調査区南側に位置し H2号住居址を切る。東西に延びる溝で検出部の長さ6.00m、幅1.38～2.59m、深さ0.31～0.84mを測り、主軸はN-79°-Eである。断面の立上りは緩く、埋土は黒色土を基調とする堆積土である。

遺物は弥生土器・土製円板等が出土した。1は弥生土器の甕である。胴部中位に最大径をもち、口縁部は外反して端部は丸くおさまる。胴上位～口縁部に櫛描波状文が、頸部には櫛描縷文が施される。2は土製円板である。甕の体部を転用したものである。

**D1号土坑** 調査区中央北寄りで検出され、東側は調査区外へ延びる。東西1.54m、南北1.18m、

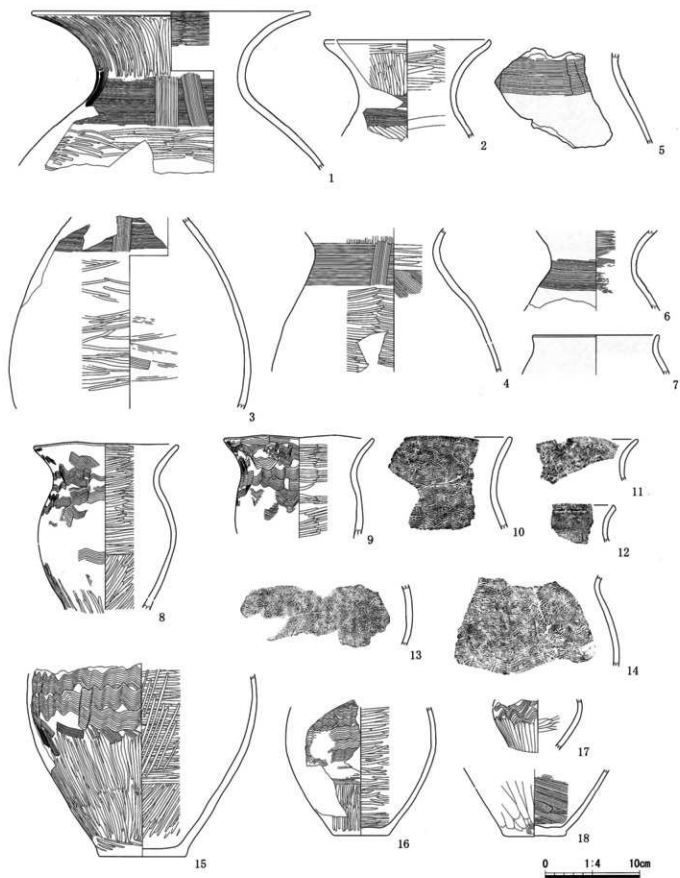


第10図 H2号住居址遺構実測図

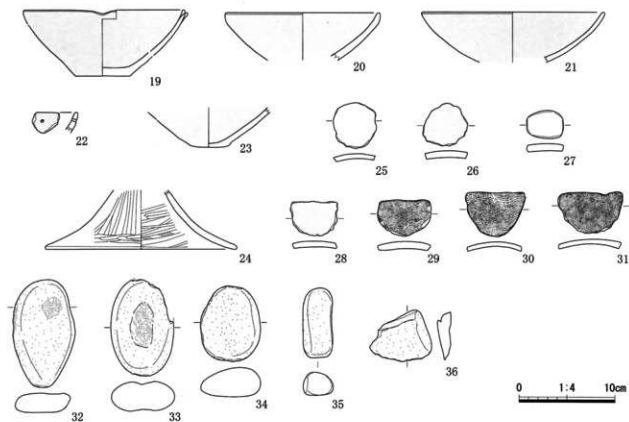
深さ0.69~0.88mを測る。平面は楕円形を呈すると考えられ、断面は逆台形を呈する。底面西側にビット状の掘り込みが認められる。遺物は出土しなかった。

**D2号土坑** 調査区中央に位置し、南側を攪乱に切られる。東西1.66m、南北2.21m、深さ0.46~0.54mを測る。断面逆台形を呈する。遺物は弥生土器と蔽石が出土した。1は壺である。無彩でミガキが施される。2は甕である。口縁部に櫛描波状文が、頭部に櫛描横線文ないしは簾状文が施される。3は壺の底部と考えられる。4は蔽石と考えられる。

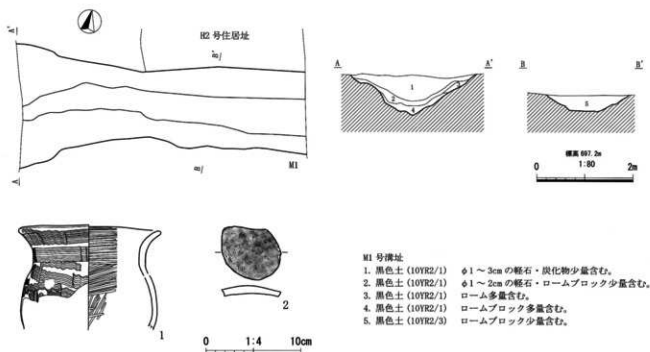
**ビット** P1~P5の5基が検出された。P1は楕円形を呈し、長軸0.39m、短軸0.29m、深さ0.19mを測る。P2は円形を呈し、長軸0.43m、短軸0.41m、深さ0.13mを測る。P3は楕円形を呈し、長軸0.43m、短軸0.28m、深さ0.19mを測る。P4は円形を呈し、長軸0.35m、短軸0.32m、深さ0.10mを測る。P5は隅丸方形を呈し、長軸0.23m、短軸0.19m、深さ0.12mを測る。いずれの埋土も黒褐色土を基調とする。遺物が出土していないため時期は不明である。



第11图 H2号住居址遗物实测图



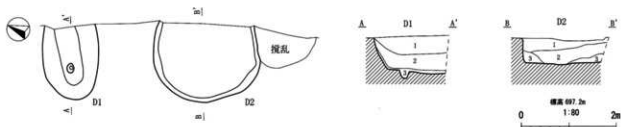
第12図 H2号住居址遺物実測図(2)



M1号溝址

1. 黒色土 (10YR2/1)  $\phi$ 1~3cmの軽石・炭化物少量含む。
2. 黒色土 (10YR2/1)  $\phi$ 1~2cmの軽石・ロームブロック少量含む。
3. 黒色土 (10YR2/1) ローム多量含む。
4. 黒色土 (10YR2/1) ロームブロック多量含む。
5. 黒色土 (10YR2/3) ロームブロック少量含む。

第13図 M1号溝址遺構・遺物実測図

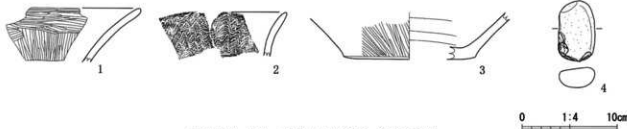


#### D1号土坑

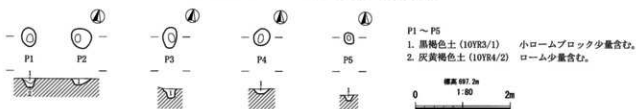
1. 黒色土 (10YR2/1) 小ロームブロック少量含む。
2. 黒褐色土 (10YR3/1) ロームブロック多量含む。
3. 褐灰色土 (10YR4/1) ローム少量含む。

#### D2号土坑

1. 黒褐色土 (10YR3/1)  $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の軽石少量含む。
2. 灰黄褐色土 (10YR4/2)  $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の軽石・ロームブロック少量含む。
3. 褐灰色土 (10YR4/1)  $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の軽石少量含む。



第14図 D1・D2号土坑遺構・遺物実測図



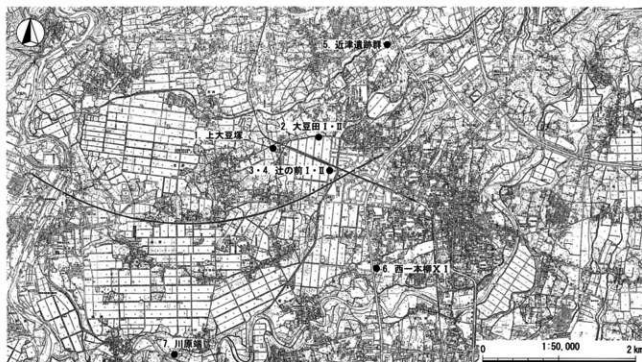
第15図 ビット遺構実測図

## 第IV章 まとめ

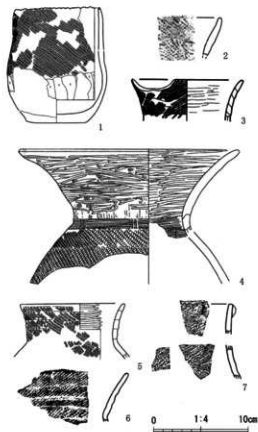
今回の調査では、西近津遺跡群が展開する田切台地末端部に位置する弥生時代後期の集落跡が検出され、当該期集落がJR小海線西側まで広がることが確認できた。検出された遺構は竪穴住居2棟、溝1条、土坑2基、ビット5基である。H1・2号住居址出土遺物を見ると、壺・甕ともに口縁部は外反する単純口縁が主体となり明確に受口状のものは認められない。甕は口縁部に最大径をもち、なで肩で胴部の張り弱い形態となる。これらは弥生時代後期後半の箱清水式土器に比定され、住居址も当該期の住居址であると考えられる。H1号住居址は北側が調査区外に延びるため全容は不明だが、比較的大型の住居址と考えられ、床面積は70㎡程度と想定される。M1号溝址については、H2号住居址より新しいが、弥生土器以外の土器が認められないことから、弥生時代後期後半に帰属する可能性が高い。D2号土坑は弥生時代後期の所産と考えられる。D1号土坑は形状から縄文時代の落し穴の可能性も考えられる。ビットに関しては帰属時期・性格ともに不明である。

特殊な遺物として、H1号住居址より出土した縄文施文の甕(第8図1・第17図1)がある。これは弥生時代後期後半の赤井戸式ないし吉ヶ谷式土器と考えられる。赤井戸式土器は群馬県東部の赤城山南麓及び富岡市周辺の鍋川流域に分布し、吉ヶ谷式土器は埼玉県北西部の比企丘陵周辺に分布する土器群である。この二つの土器群は、縄文施文と口縁部の粘土帯積み上げ痕を特徴とするが、従来からその近縁性が指摘されており、同一型式と捉える見解もある。H1号住居址から出土した甕については、赤井戸式あるいは吉ヶ谷式の搬入品と考えられ、いずれかに断定するのは困難だが、佐久山地を越えて北関東からもたらされたことは間違いない。佐久市内において、このような弥生時代後期の縄





第16図 縄文施文土器出土遺跡分布図（遺跡番号は第17図に対応）



第17図 弥生時代後期縄文施文土器実測図  
（2～7実測図は各報告書より転載）

施文土器は、破片資料が数点確認されているにすぎない（第16図・17図）。本遺跡出土の小型甕は唯一完形に復元し得るものであり、貴重な資料である。他遺跡の資料を概観すると、2・3・5・7は甕と考えられ、いずれも口縁部まで縄文施文される。2・3・5は粘土帯積上げ痕を有する。7の形態は本遺跡資料に近く、体部からわずかにくびれ、口縁部が直立して立上る。口縁部には左右から積み出したような突起が付く。6は壺か甕と考えられ、2・3・5と同様の特徴をもつ。4は壺であるが、器形や頸部の櫛描簾状文から、縄文施文土器の影響を受けた在地の土器と考えられる。1・3・4は弥生時代後期後半の住居址からの出土であり、他は溝や遺構外からの出土である。

わずかな資料ではあるが、その分布は現在のところ佐久市北部に限られている。東部に位置する後家山遺跡・東久保遺跡・深掘遺跡群などでは認められない。碓氷峠を越えて群馬県側との交流が行われていたのだろうか。いずれにせよ、出現頻度や縄文施文を取り入れた4のような壺の存在から、佐久市内においては西近津遺跡群・周防畑遺跡群周辺の集落がもっとも縄文施文土器を受け入れていたと考えられる。ここでは縄文施文土器として一括してしまっただが、個々の資料がいずれの型式に帰属するものか、今後詳細な検討を行い、北関東地域との交流の在り方を検討していく必要がある。

遺構	番号	種類	器種	法量 (cm)			調整・文様		備考
				口径	底径	器高	内面	外面	
H1	1	弥生土器	甕	8.8	6.4	12.2	ケズリ・ナデ	ナデ・ケズリ・縄文 (LR)	
	2	弥生土器	壺	(36.8)	—	(19.3)	ミガキ・赤彩	柳描簾状文・柳描横線文・ミガキ・赤彩	
	3	弥生土器	壺	(23.6)	—	(6.5)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	4	弥生土器	壺	(6.6)	—	(3.7)	ナデ	ミガキ・赤彩	無頭壺
	5	弥生土器	甕	—	9.8	(13.4)	ハケ	ミガキ・赤彩	炉に転用
	6	弥生土器	甕	—	13.2	(17.0)	ミガキ	ケズリ・ミガキ・柳描波状文	炉に転用
	7	弥生土器	甕	27.0	8.1	29.2	ミガキ	ミガキ・柳描簾状文・柳描波状文	
	8	弥生土器	甕	13.6	—	(10.5)	ミガキ	柳描波状文	
	9	弥生土器	甕	14.9	—	(15.9)	ミガキ	柳描簾状文・柳描波状文	
	10	弥生土器	甕	—	—	(13.4)	ハケ・ミガキ	柳描簾状文・柳描波状文・ミガキ	
	11	弥生土器	甕	—	8.0	(7.9)	ミガキ	ミガキ	
	12	弥生土器	甕	—	—	(6.8)	ミガキ	柳描波状文・柳描簾状文	
	13	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	ミガキ	柳描横線文・柳描斜走文	
	14	弥生土器	甕	—	—	(4.2)	ミガキ	柳描横線文・柳描斜走文	
	15	弥生土器	甕	—	—	(3.0)	ミガキ	柳描波状文・縄文	
	16	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	ミガキ	柳描横線文	
	17	弥生土器	鉢	(17.0)	—	(5.6)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	18	弥生土器	鉢	(15.2)	—	(5.4)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	19	弥生土器	鉢	—	4.5	(4.5)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	20	弥生土器	高坏	(26.6)	—	(4.2)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	21	弥生土器	高坏	(23.8)	—	(4.1)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	22	弥生土器	高坏	—	(11.8)	(10.2)	脚部ヘラナデ	ミガキ・赤彩	
	23	弥生土器	高坏	—	—	(4.4)	ナデ・ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	24	弥生土器	高坏	—	10.2	(4.1)	ナデ	ミガキ・赤彩	
	25	縄文土器	深鉢	—	—	(1.6)		沈竈文	
H2	1	弥生土器	壺	(29.2)	—	(16.4)	ミガキ	柳描T字文・ミガキ	
	2	弥生土器	壺	(17.4)	—	(10.5)	ナデ・ミガキ	柳描横線文・ミガキ	
	3	弥生土器	壺	—	—	(20.1)	ハケ	柳描T字文・ミガキ	
	4	弥生土器	壺	—	(15.2)	—	ハケ・ナデ・ミガキ	柳描T字文・ミガキ	
	5	弥生土器	壺	—	—	(9.6)	ハケ・ナデ・ミガキ	柳描波状文・ミガキ・赤彩	
	6	弥生土器	壺	—	—	(8.4)	ハケ・ナデ・ミガキ	柳描T字文	
	7	弥生土器	壺	(13.4)	—	(4.2)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	広口壺
	8	弥生土器	甕	14.9	—	(17.4)	ミガキ	柳描波状文・ミガキ	
	9	弥生土器	甕	(17.6)	—	(10.5)	ミガキ	柳描波状文	
	10	弥生土器	甕	—	—	(9.7)	ミガキ	柳描波状文	
	11	弥生土器	甕	—	—	(4.4)	ミガキ	柳描波状文	
	12	弥生土器	甕	—	—	(3.9)	ミガキ	柳描簾状文・柳描波状文	
	13	弥生土器	甕	—	—	(6.1)	ミガキ	柳描波状文	
	14	弥生土器	甕	—	—	(9.6)	ミガキ	柳描波状文	
	15	弥生土器	甕	—	(9.2)	(19.5)	ミガキ	柳描波状文・ハケ・ミガキ	
	16	弥生土器	甕	—	(6.0)	(13.7)	ミガキ	柳描波状文・ミガキ	
	17	弥生土器	甕	—	—	(5.6)	ミガキ	柳描波状文・ミガキ	
	18	弥生土器	甕	—	6.7	(7.3)	ハケ	ハケ・ナデ	
	19	弥生土器	片口鉢	(17.7)	5.9	7.0	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	20	弥生土器	鉢	(16.4)	—	(5.0)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	21	弥生土器	鉢	(19.2)	—	(5.3)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	22	弥生土器	鉢	—	—	(2.2)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	23	弥生土器	鉢	—	4.1	(4.2)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
	24	弥生土器	高坏	—	(20.2)	(6.2)	ハケ・ナデ・ミガキ	ミガキ	
M1	1	弥生土器	甕	14.6	—	(10.7)	ミガキ	柳描簾状文・柳描波状文	
D2	1	弥生土器	壺	—	—	(5.7)	ミガキ	ミガキ	
	2	弥生土器	甕	—	—	(4.6)	ミガキ	柳描波状文	
	3	弥生土器	壺	—	(14.0)	(4.9)	ナデ	ミガキ	

第2表 遺物一覧表 (土器)

遺構	番号	器種	法量 (cm)				石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重量		
H1	26	紡錘車	—	—	0.8	8.17		径 3.1 cm、孔径 0.5 cm
	27	紡錘車	—	—	(1.0)	(12.56)		径 (5.2) cm、孔径 (1.0) cm
	28	土製円板	5.9	6.6	0.7	29.28		
	29	土製円板	2.6	3.9	0.8	10.83		
	30	土製円板	2.7	3.7	0.6	7.06		
	31	鉄鏝	3.1	(2.6)	0.3	(3.11)		無茎 根挟み痕あり
	32	不明	(2.8)	(0.6)	(0.2)	(0.76)		
	33	磨厳石	11.9	7.4	3.3	(457.38)	安山岩	表裏面に磨痕、上下端部に敲打痕
	34	磨厳石	11.1	7.3	4.0	438.34	花崗岩	表面に磨痕、表裏・上下・両側に敲打痕
	35	磨厳石	7.6	7.2	5.5	396.25	安山岩	表面に顕著な磨痕、全体に弱い磨痕、上部・両側に敲打痕
	36	削器	(4.9)	8.7	0.8	(46.25)	黒色頁岩	
	37	砥石	21.0	9.2	3.2	882.44	砂岩	被熱
	H2	25	土製円板	4.8	4.6	0.6	13.98	
26		土製円板	4.5	4.8	0.7	16.68		
27		土製円板	2.9	3.8	0.8	11.45		
28		土製円板	3.7	5.0	0.6	12.30		
29		土製円板	3.9	5.7	0.7	20.00		
30		土製円板	4.7	6.4	0.6	16.72		
31		土製円板	4.4	6.7	0.7	20.37		
32		砥石	11.4	6.6	2.3	247.68	砂岩	表面、左側、下部に敲打痕
33		砥石	(10.2)	(6.7)	(3.1)	(267.50)	安山岩	上部欠損、表裏面に敲打痕
34		磨厳石	8.0	6.3	3.1	243.05	安山岩	表面に磨痕、上下・左側に敲打痕
35	磨石	7.4	3.2	2.4	97.07	黒色頁岩	下部に磨痕	
36	削器	5.5	6.5	1.4	47.22	ホルンフェルス		
M1	2	土製円板	5.8	6.3	0.8	31.01		
D2	4	砥石	6.3	3.9	2.1	86.33	黒色頁岩	下部に敲打痕

第3表 遺物一覧表 (土製品・石器・鉄製品)

## 参考文献

- 大木紳一郎 1991「赤井戸式土器の祖型について」『研究紀要』8 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
群馬県教育委員会 1997「南蛇井増光寺遺跡Ⅴ」  
小出 輝雄 2000「古ヶ谷式土器の系譜」『YAY!』弥生土器を語る会  
佐久考古学会 1990『赤い土器を追う』  
佐久市教育委員会 2010『岩村田遺跡群西一本柳Ⅳ』  
佐久市教育委員会 1999『西一本柳Ⅲ・Ⅳ』  
佐久市教育委員会 2004『後家山遺跡東久保遺跡宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』  
佐久市教育委員会 2001『大和田遺跡群川原端遺跡』  
佐久市教育委員会 2005『佐久市文化財 年報 13』  
佐久市教育委員会 2008『周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ』  
佐久市教育委員会 2003『佐久駅周辺土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』  
佐久市教育委員会 2001『周防畑遺跡群辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ』  
長野県考古学会 1999『長野県の弥生土器編年』  
長野県埋蔵文化財センター 2013『鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群』



上大塚塚遺跡調査区全景（南から）前方右端が浅間山



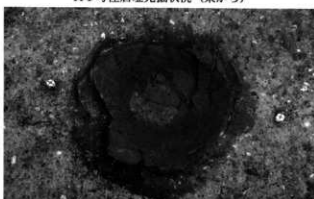
H1号住居址完掘状況(西から)



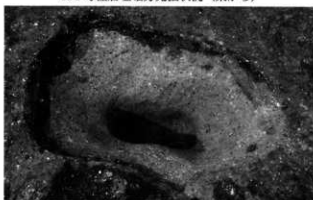
H1号住居址完掘状況(東から)



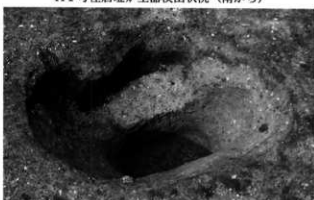
H1号住居址掘方完掘状況(東から)



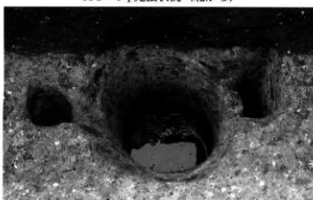
H1号住居址炉土器検出状況(南から)



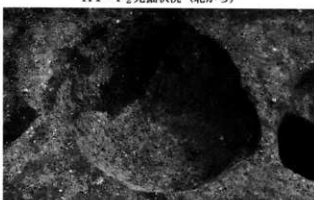
H1-P<sub>1</sub>完掘状況(北から)



H1-P<sub>2</sub>完掘状況(北から)



H1-P<sub>5</sub>完掘状況(東から)



H1-P<sub>8</sub>完掘状況(北から)



H2号住居址完掘状況(南から)



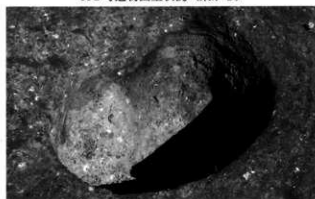
H2号住居址完掘状況(北から)



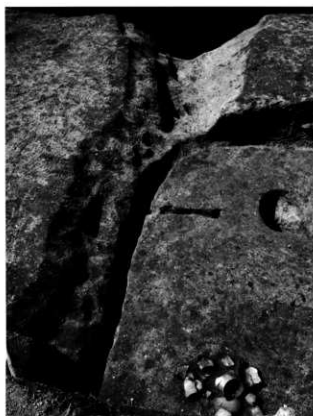
H2号住居址堀方完掘状況(南から)



H2号遺物出土状況(東から)



H2-P2完掘状況(北から)



M1号溝址完掘状況 (東から)



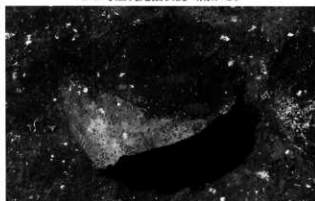
M1号溝址セクション (東から)



D1号土坑完掘状況 (南から)



D2号土坑完掘状況 (西から)



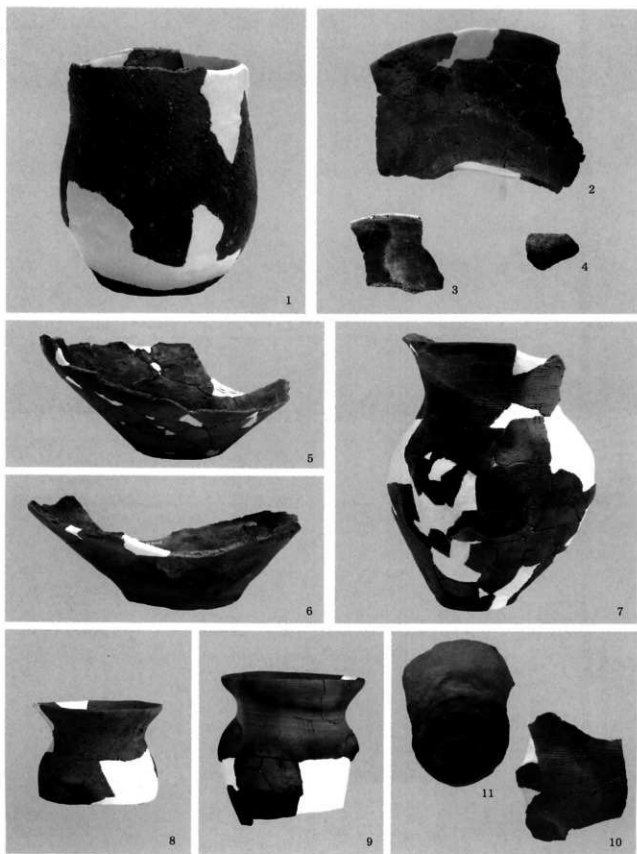
P1セクション (南から)



P3セクション (南から)

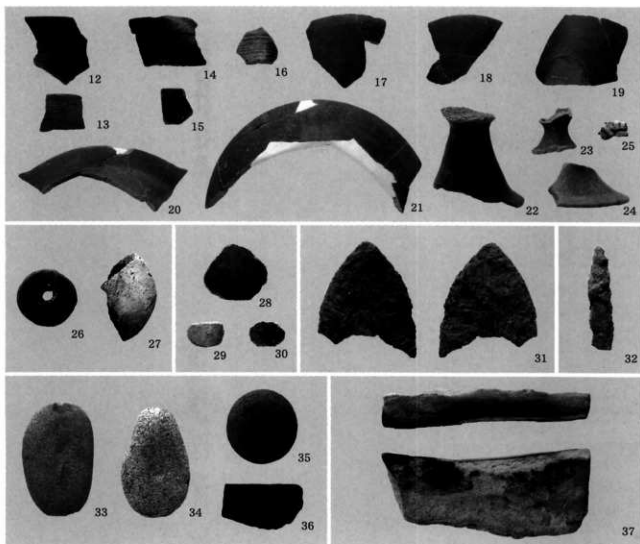


P5セクション (南から)

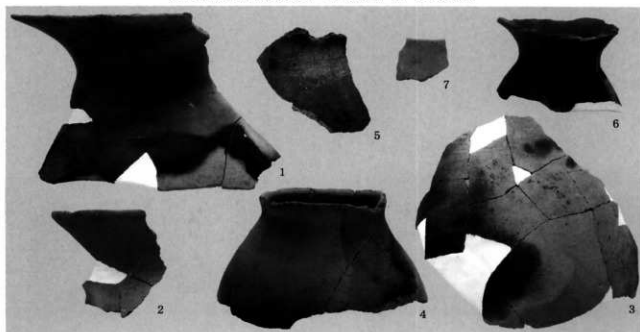


H1号住居址出土遺物

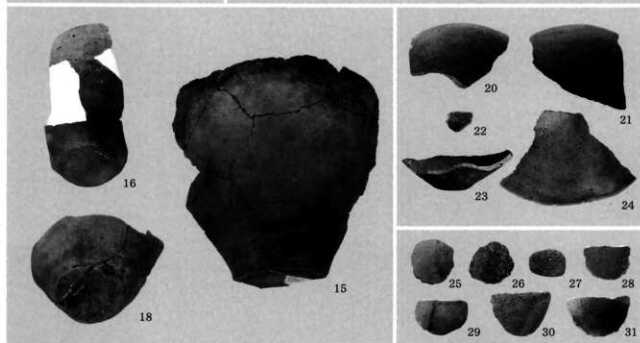
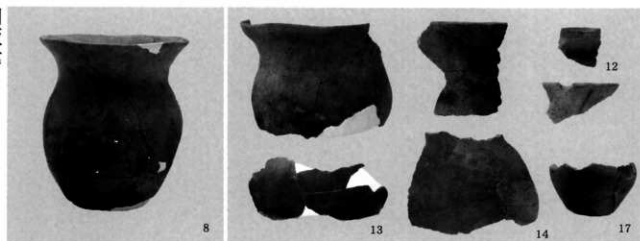




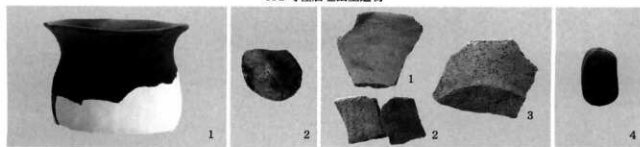
H1号住居址出土遺物 (26・27は1/2、31・32は等倍)



H2号住居址出土遺物



H2号住居址出土遺物



M1号溝址出土遺物

D2号土坑出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にしちかついせきぐん・ときだいやしきいせきぐん かみだいずづかいせき							
書名	西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群 上大豆塚遺跡							
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第217集							
編著者名	久保 浩一郎							
編集機関	佐久市教育委員会 文化財課							
所在地	長野県佐久市志賀 5953 Tel:0267-68-7321 Fax:0267-68-7323							
発行年月日	平成26年(2014) 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
にしちかついせきぐん・ ときだいやしきいせき ぐん かみだいずづか いせき 西近津遺跡群・ 常田居屋敷遺跡群 上大豆塚遺跡	さくしながとろ 佐久市長土呂 1931-1 1932-1 1932-2 1932-4	20217	28 29	36° 16' 50"	138° 27' 8"	20130305 ～ 20130313	150	宅地 造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西近津遺跡群・ 常田居屋敷遺跡群 上大豆塚遺跡	集落址	弥生時代	竪穴住居址 2軒 溝 址 1条 土 坑 2基 ピ ッ ト 5基	弥生土器・土製品 (紡錘車・土製円 板)、石器(磨石・ 敲石・砥石)、鉄 器(鉄鏝)				
要 約	佐久市北部の田切り台地上に展開する、西近津遺跡群南端部に位置する弥生時代の集落址である。後期後半に位置付けられる竪穴住居址2棟が検出され、箱清水式土器と赤井戸式あるいは吉ヶ谷式と考えられる縄文施文土器が出土した。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第217集  
西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群 上大豆塚遺跡

平成26年(2014) 3月

編集・発行 佐久市教育委員会  
〒385-8501 長野県佐久市中込 3056  
文化財課  
〒385-0006 長野県佐久市志賀 5953  
Tel:0267-68-7321

印刷所 キクハラインク南

